

I. スポーツの市場化と公共性

1. ドイツ連邦共和国における スポーツの市場化とスポーツ運動・システム

高津 勝

はじめに

ドイツ連邦共和国(BRD)のスポーツとそのシステムについては、K.Gieselerに代表されるように、次のような特徴づけが支配的である。

すなわち、非経済的社団としてのスポーツフェライン(以下、スポーツクラブという)に基礎をおき、ドイツ・スポーツ連盟(DSB)という全国的組織を持ち、国家および地方自治体とのパートナーシップのもとで社会的に編成されるもの、という理解である。しかし、今日のドイツのスポーツ動向を的確に把握するためには、そのような理解では不十分である。なぜなら、1970年代、とりわけ80年代以降の旧西ドイツにおけるスポーツの新たな展開が、そのような理解の修正をせまっているからである。

本稿は、BRDにおける最近の研究動向を紹介しながら、通説的な理解とは異なる新たな観点を提出するとともに、ドイツにおける世紀転換期のスポーツ動向に理論的なスポットをあてようとするものである。

I. 70年代のスポーツ動向と社会的構造分析

(1) D.H.Jüttingの社会的構造分析

1970年代といえば、公共スポーツ施設が拡充・整備され、DSBに代表されるスポーツ組織と国家・公共団体とのパートナーシップが定着した時期である。大衆的なスポーツ活動の大規模な展開は、そのような条件のもとで起った。しかし、それに対する批判的な検討は、十分になされていない。

い。D.H.Jüttingは、年齢、性、学歴、職業、収入をメルクマールにして、この時期のスポーツ動向を次のように特徴づけている。

- a. 年齢とともにスポーツ活動は減少する。
- b. 女性の参加は少ない。

	男性	女性
規則的	23%	15%
ときどき	22%	21%

c. 運動量および種目の選択という点で、学歴が非常に大きく影響する。低学歴者はスポーツ、特に伝統的(オリンピック)種目に消極的で、バドミントン、ミニゴルフ、卓球などを好む。

d. 職業労働が、成人期のスポーツ活動にとって、さらに重要な決定要因になる。労働者は、職員や公務員に比し、スポーツにおいて代表されない。

e. 収入の多い家族はスポーツ活動が盛んであり、成人のスポーツ活動は主に中層と上層の住民によって担われている。

(2) スポーツ活動の形態・内容

成人の33%がスポーツを行なっている。ほとんどは規則化されておらず、自己解放的なもの、消費支出(時間・金銭、器具)の少ないもの、他者への依存度の少ないものが好まれる。成人の場合、コミュニケーション、社交、自然と親しむ種目、エネルギーをあまり要しない種目を行なっている。

定期的に行なわれる種目は、①散策(52%)、②徒手体操(32%)、③水泳(31%)、④ハイキング(10%)、⑤ボーリング(15%)、⑥サッカー(12%)、⑦ダンス(11%)、⑧器械体操(10%)、である。

(3) スポーツの社会化と階層的特殊性

Jüttingによれば、スポーツ活動は、生涯にわたり、階層的な特殊性を示す。

第1に、青少年期にスポーツをした者は、成人になってもチャンスが多い。

第2に、職業活動が成人期の社会化に決定的な影響力をもち、肉体労働、頭脳労働、自営業などの職種、活動空間、職業的地位、収入が、職業外の活動を規定する。身体的負担が少なく、自立的な活動を行なう職業が、スポーツ活動にとって有利である。

第3に、世帯主の職業状態が、家族全体のスポーツ活動に影響を及ぼす。

第4に、日常の様々な要求との競合関係のなかで、定期的にスポーツをすることは、成人にとって困難である。

第5に、昇進、結婚、子どもづくりや自由な時間の欠乏が、マイナスに作用する。

そのような困難のなかで、クラブ、成人学校、企業、余暇産業のスポーツ・プログラムは、近年、「市場モデル」に従って展開している。「みんな」のためにスポーツクラブを開放することは、50年代末から宣伝された。第2の道、トリム運動とともに、持久走、ハイキング、スキーマラソンなどの大行事が導入され、会員が増加した。しかし、大多数の成人にとって、持続的・定期的なスポーツ活動の動機づけにはならなかった。

II. スポーツの大衆的展開と「クラブスポーツ」の地位の相対的低下

(1) G.Eichlerによる「クラブスポーツ」批判
Eichlerの場合、BRDの誇る「クラブスポーツ」への批判は、より徹底している。

DSBによれば、1980年の各州スポーツ連盟の会員数は1,444万人。住民比23.6%である。

だが、第1に、女性の組織率は全年齢をとおして低位である。成人も低く(16.4%)、その増加率は低下しており、児童と青少年のみが顕著な増加傾向を示している。

第2に、余暇にスポーツを行なう成人の割合は、70年代の初頭以来、組織された者の比率よりはるかに高い。にもかかわらず、クラブに組織された少数者が、スポーツ現象のなかでは支配的な存在となる。というのは、クラブは、大衆的なスポーツ振興のための公的補助の独占者だからである。

第3に、組織的スポーツ人口の約10%が、定期的に、つまり月に何回もスポーツをする。未組織の「私的な」スポーツ活動の場合、それよりはるかに低い。それは、定期的な競技会のために1つの種目をトレーニングする古典的な意味でのスポーツではなく、解放的、遊戯的、社交的に行なう身体活動である。とりわけ、運動能力や組織、財政への依存度の少ない、自然と結びついた種目(水泳、スキー、ハイキング、卓球、陸上競技、乗馬、アイススケート)において、クラブに依存しないスポーツ活動が活発である。

第4に、組織されたスポーツは、それ自体、スポーツへの大衆の受動性の要因をなす。クラブスポーツは競技志向で多数の住民の願望を見過している。スポーツに受動的な大衆にとって、成績に執着する中間層的制度(leistungsfixierte Mittelschichtten-Institutionen)としてのスポーツは、あまりにも労働世界のコピーでありすぎる。

第5に、だが、組織されていない者が、自立したスポーツ活動を展開しようと仮定するのをもまた、幻想である。

(2) J.Mrazekの「スポーツの構造変化」論

80年代の初頭以降、BRDではフィットネスとボディービルのスタジオが急成長し、80年代末には300万人の会員を擁するようになった。この事実をふまえて、Joachim Mrazekは、スポーツの構造変化を次のように指摘する。

第1に、80年代において、クラブはスポーツ活動のための唯一の組織であった。しかし、ここ20年間でスポーツの光景は大きく変化した。そのことは、伝統的な種目の低迷に比し、ジョギング、エアロビクス、サーフィン、ボディービル、フィットネス・トレーニングの進出によって明らかであ

る。

第2に、スポーツを供給する形態も変化した。60年代まで、スポーツはほぼすべて、クラブで行なわれた。だが、新しい種目は、クラブの外で発達し、個人または商業施設で行なわれている。

第3に、スポーツの参加者にも構造的な変化が現れた。以前、スポーツは男性と青少年のものであったが、最近では女性や老人もクラブに加入する。1950年=1:8。1987年=1:2（以上、男女比）。クラブ外では、この傾向はさらに顕著である。

第4に、構造変化の理解にとって重要なことは、スポーツ活動に対する動機である。以前は成績、競技、成果を重視した。今日は楽しみ、健康、かつこよさ、フィットネスである。

以上で明かなように、最近のスポーツの主要な変化は、クラブの独占的な地位が低下したことである。このことは、スポーツの統一性の解体を意味する。伝統的なスポーツは、下部から頂点まで、成績・競技・結果を重視する同じ価値観、同質のシステムのもとにあった。今日、スポーツに統一的道は存在しない。

フィットネススタジオとスポーツクラブの差は、①義務が少ないこと、②個人的な条件が配慮されること、にある。だから高価でも利用する。クラブの長所は、スポーツの専門性と社会的活動にある。だが、他の社会組織より多くの義務を負う。スタジオにとって重要なことは、①組織とのコンタクトが少ないこと、②自己の身体に対する真面目な態度、である。個人主義化と自己の身体への関心の増大は、今日の社会を特徴づけている。自己のアイデンティティーを確立することが困難であるがゆえに、自己の身体において、それをカバーしようとするのである。

Ⅲ. 転換期のスポーツ～今日のスポーツ状況と その歴史的な性格規定～

70年代以降のBRDのスポーツのなかには、近代スポーツ（伝統スポーツ）とは質的に異なる新たな動向が出現した。その特質を理論的・具体的に

明らかにするためには、今日のスポーツを総体として歴史的に把握する必要がある。

以下、D.H.Jüttig(1983)、H.-J.Schulke(1983)、P.Jürgen(1988)による特徴づけを示しておこう。

(1) 2つのシステムの差異化・分極化(D.H.Jüttig)

①50年代末までのスポーツは、クラブと連盟によって組織され、会員を財源とし、アマチュアのためのトレーニングと競技活動が行なわれた。

②「第二の道」(1959年)、「ゴールデンプラン」(1959)とサッカー・ブンデスリーゲ(1963/64年)の開始とともに、プロスポーツのシステムと日常的スポーツのシステムという、2つの異なるシステムが発展した。一方で、高度競技力・競技スポーツ(Hoch-leistungssport/Wettkampfsport)。他方で、余暇・大衆スポーツ(Freizeit- und Breitensport)。

③独自のスポーツシステムへの差異的發展は、未だ完了していない。クラブ内では異なる扱いがなされ、練習場や練習時間は選手が優先される。政府・政党・スポーツ連盟は、口では同等といいながら、実際には選手を優先している。

以上が、D.H.Jüttigによる今日のスポーツの動向把握である。

(2) 膨張・差異化と関連性(H.-J.Schulke)

次に、H.-J.Schulkeによる今日のスポーツの歴史的な段階規定を示そう。

①近代スポーツは、その発展の過程で膨張し、差異化した。

②伝統的スポーツ活動とは異なる、新しい形態の発展が始った。70年代のスポーツ活動の拡大は、新しい質なしには不可能であった。若者に担われた50年代、60年代の伝統的スポーツと並んで、より広範なスポーツのシステムが出現した。その構造、内容、法則性は、わずかしは解明されていない。

③大衆スポーツ(Breitensport)と高度化スポーツ(Spitzensport)が完全に関係なしに存在しているのではない。それらは、おそらく末端で連続し、

互いに関連し、多面的な移行形態が存在する。

(3) スポーツの市場化とクラブスポーツの競合・共生 (P. Jürgen)

ドイツスポーツ連盟 (DSB) の P. Jürgen はドイツのスポーツに関し、次のような現状認識と展望を示している。

① スポーツを提供するための社会的・経済的状況は、戦後の創設期とは根本的に変化した。

② 市場化されるスポーツは、徐々に商業に委ねられる。クラブは、いまなお、競技スポーツをテリトリーにしている。大クラブと商業的サービスとは競合関係にある。商業的施設の成長は停滞し、業績のよいものが存続する。それらのうちの多くは、クラブと提携することになるだろう。

③ 21世紀の余暇・大衆的スポーツの成長は、商業的活動とクラブの対立にもとづく。市場経済の内部で、スポーツの市場化とスポーツクラブ (市民的自治組織) に基礎をおく公共的スポーツ運動は、競合と共生のもとで展開する。

IV. 小括

見てきたように、BRDのスポーツは、構造的な転換期にある。

今日、オリンピック種目に象徴される「近代スポーツ」とそれを支えてきたクラブ組織は、その地位を相対的に低下させつつある。伝統的な種目に依存してきたBRDのスポーツクラブは、いまやスポーツ活動のための唯一の存在ではなくなっている。

その傾向が顕在化するのには、皮肉にも、じつは、BRDにおいて、クラブを基軸にした大衆的なスポーツ・システムが構造的に定置された1970年代以降であった。

いまや、非経済的社団としてのスポーツクラブに組織されたスポーツをもって、BRDのスポーツ・システムを典型化することはできない。現代のドイツのスポーツの内部に、2つの異なるシステムが成長しつつあるからである。

その是非を「高度化と大衆化の統一」という「理念型」、ないし「基準」をもって判定してみたところで、現実のスポーツ活動のなかにある多様な可能性と変革のエネルギーを汲みとることはできないであろう。

スポーツは、今日、産業化・商業化とマスメディアの発達に条件づけられながらも、既存の組織的な枠組みを越えて多様に展開している。

そうしたなかで、一見、関わりがないと思われがちな「普通」の人々のスポーツに対する関心と態度が、実際には、スポーツの現実と未来を大きく規定するようになったのである。

現代とは、大衆との関わりを抜きにして、スポーツの未来を展望しえない時代なのだ。問題の核心は、そこにおいて大衆は主体か、それとも客体か、あるいは、いかにして主体たりうるか、ということである。

【参考文献】

- (1) Gieseler, Karlheinz u.a.: Der Sport in der Bundesrepublik Deutschland, Wiesbaden 1983.
- (2) Jütting, D.H.: Freizeitsport. In: Schulke, H.-J. (Hrsg.), Kritische Stichwörter zum Sport, München 1983.
- (3) Jütting, D.H.: Erwachsenensport. In: Schulke, H.-J. (Hrsg.), a.a.O.
- (4) Eichler, Gert: Sportpassivität. In: Schulke, H.-J. (Hrsg.), a.a.O.
- (5) Mrazek, Joachim: Fitness-Studio und Sportverein als konkurrierende Modelle. In: Schulz, Norbert/Allmer, Heinnig (Hrsg.), Fitness-Studios. Anspruch und Wirklichkeit. Brennpunkt der Sportwissenschaft, 1988/2.
- (6) Palm, Jürgen: Die Situation in der Bundesrepublik Deutschland. In: Schweizerischer Landesverband für Sport (Hrsg.), Kommerzielle Sportanbieter: Chance oder Gefahr für die Sportvereine im Breiten- und Freizeitsport, 1988.